

対話の力

機上で優しく接してくれたコスタリカ人夫婦と Lynn さん、歴史博物館の前でお手製のオカリナを吹いて楽しませてくれた男性、神秘的な動物を形取ったコスタリカ先住民の美しい民芸品や家具。リタ・マリーさんにはじめてお目にかかったときに受けた誠実さと慈愛から得たコスタリカへの好印象は今回も続きました。

本会議の第1日と2日は、Appreciative Inquiry(AI=良い点を評価・感謝しつつ探ること)の提唱者 David Cooperrider 氏のファシリテイトで、The Next Steps Process について学びました。AI とは個人やグループ、組織のポジティブな面に焦点を当て成功例を発見し、個人の潜在的な能力を組織やグループの共有のビジョンに取り入れていくプロセスです。AI の素晴らしいところは、全員が前向きな対話によって共同で探求し共有したものが全体の推進力となっていくところでしょう。

確かな未来のビジョン。それを共有することが力となります。JUMP も全員が共通のビジョンを持つことで、今までばらばらだった力を有効に発揮できると思います。次のステップとして、まだ明らかではない潜在力を再発見し、未来の組織の姿や目的達成への手法をビジョンにして全員で分かち合う機会を設ける必要があると思いました。(カントリ - レポート参照)

3日目に、Restorative Justice についてカナダの Penny Joy さんの発表を聞きました。

犯罪事件が起きると恐れと猜疑心で硬直してしまいがちな地域コミュニティを丸ごと修復させるというやり方が Restorative Justice(人とコミュニティを修復する公正なプロセス)* です。罰を与えて社会に恐怖を植え付ける一般的な Justice の正反対のアプローチです。多くは、若者を再生するための社会教育として始まりました。罪を犯した人、被害を受けた人、それを取り巻く人々も含めたグループが訓練されたファシリテータの元で対話するプロセスを積み重ねます。犯罪者さえも尊厳を取り戻すことができ、人間的なつながりを持つ地域コミュニティへと癒し、再生していきます。

地域社会の修復の試みは以前から行われてきましたが、NVC の手法を取り入れたところから進歩していきました。成功例をカナダで取り入れて実践している報告でした。

日本の文化と JAPAN サミットの意義を再認識

・ 今後は日本が率先してアジアからの参加国を増やす工夫をしたいと思いました。JAPAN サミットでは、アフリカン・アライアンスを立ち上げるという偉業が実現しました。将来はアジアにもアフリカのような平和的な市民グループのネットワークを作りたいです。

・ 日本の文化を再認識しました。JUMP では「自分の意見に同意を得ることなしには先に進めることをしない」のですが、欧米のリードは綱引きのような印象を持ちました。日本には、日本に似合う「平和の文化」の創り方があるのではないかと思います。日本独自の文化を生かして、もっと率先して、コスタリカが中南米でしているような調停役が果たせるのではないかと思います。

やよし 洋子

.....
* 「修復的司法」と訳すこともありますが、Penny さんの紹介事例は司法の枠組み外の地域社会の取り組みでした。

元気とハート

よく笑い、よく踊り、よく歌う(ユースに限らず)

実際の効果を考え計画的に活動していて、それぞれ持ち味を出している。「自らが平和であること」を深く内面化し、自然に実行しているという印象。活動を継続するには心から楽しんでいなくちゃ！と心底思っているようにみえた。

撮影・ストリーミングなどのメディアチームは学生ボランティア

ユースの集まり(20日の夕食後)の内容

- サミット参加者の若者(35歳までがユースと定義)と、国連平和大学やグローバル・カレッジ(世界数カ国の提携校で学べるプログラム)の学生有志(米国人が多い)も参加。
- 自然発生的にダンスから始まった。
- 5分毎に不作為に選んだペアで自己紹介。

グローバル・カレッジのドイツ人の学生に「平和省って今回初めて知ったけど、とても興味あるよ！次は日本にできるんでしょう？」と言われた。

- プレゼンテーション

アレン(米国)

「シカゴで受けたトレーニングで、いかにして自分のコミュニティで“ピースビルダー”になるかということ学んだ」「メディアも少しずつ巻き込んでいる」

タラ(コスタリカ)

「今回のサミットの国際企画チームがとても楽しかった」

「激務だったし、たまに落ち込むこともあったが、プランの時間が大好き」

キャスリーン(アイルランド)

経験に基づく具体的な運営上のアドバイス。♫の一言は

「ハートを、情熱を持ち続けること！ただし、無理しすぎず、楽しむこと！」

テディとシグリッド(デンマーク)

テディ「ビジネスの視点をピースビルディングに活かしたい」

シグリッド「平和活動に関わってスピリチュアルな部分でも学ぶことが多かった。仏教と通底していると感じる」

アレクサンドラ(ルーマニア)

「地域のユース議会プログラムや国連ユース代表プログラムなどで活動」「社会問題は、失業率上昇など若者に直接影響するものが多いだけに、ユースが積極的になることはとても大切だと思う」

ナホコ(日本)

「JUMPは、平和省設置のみならず、「平和の文化」を広めること、自分たちも平和であることを目指している」「日本の若者は、90年代以降の不況と冷戦崩壊後のバックラッシュで右傾化しつつあることが気がかりだが、JUMPのメール会員でもイベントごとにボランティアに加わる若者がいて希望も持てる」

感動、安心、希望

- ・回を重ねるごとに、運動が世界に広がっていることを実感。毎年会えるなつかしい顔、初めて会う顔、どちらも嬉しい。
- ・今回の会議で使ったAppreciative Inquiryは、メンバーの能力を最大に引き出し、グループとして目標を実現していく方法として素晴らしい。もっと学び、JUMPでも生かしたい。
- ・会議開催前に5日間Be Peaceコースを受講したことで「世界を平和にしたいなら、自分自身がまず平和になる」ということが以前よりさらに腑に落ちた。
- ・ホストファミリーが料理好きのカナダ人女性で、滞在がさらに豊かになった。
- ・非暴力コミュニケーションは英語のほうがやりやすい、日本語だと不自然な感じがする、ということにずっと違和感があったが、一番大切なのは、自分と相手の心につながっていること、つながろうとすることだと気づいたら、気持ちが楽になった。
- ・2年前にラスール財団に行ったときにリタ・マリーさんから見せてもらった設計図の中身が、ビジョンとリーダーシップと多くの人のボランティア精神によって素晴らしい建物と庭になっていた。すばらしい。
- ・GAの会の運営の仕方がクリエイティブ。みんなで必要な仕事のポスト(席)を決めて、ハートガイダンス(Be Peaceの教えの一つ)で「自分がこの仕事をやる」と心の声がした人が席についていった。アジア/オセアニアの責任者が最後まで空席だったが今回参加できなかったオーストラリアのピアンカさんにメールで相談すると承諾してくれた。
- ・言葉のことでやよしさんと稲葉さんのことが最初は気がかりだったが、2人で助け合って存分に参加していたのがうれしかった。途中からまったく気にならなくなった。
- ・タクシー代が高かった。
- ・非暴力平和隊やピースブリゲードの国際的非暴力市民組織の活動の話が聞けてよかった。軍隊の存在にくらべてあまりに小さいが、大きな希望。
- ・アランナさんの「平和の経済学」で習った「地球の権利」の話がおもしろかった。これをさらにオンラインコースで受講して、日本に紹介したい。
- ・コスタリカサミットの会議の組み立て方はとても良いモデルで今後もいろいろな場で使えると思った。
- ・閉会式で行った「ナショナルシアター」がきれいだった。たまにはおしゃれも大事。
- ・Be the Mediaの話をしたところ、多くの人たちから「勇気やインスピレーションが湧いた」と言われた。発表の直前までパワーポイントを作っていたが、IT担当チームが助けてくれた。一人一人が持てる力を発揮して、協力して成り立っていることを実感。

きくち ゆみ

印象的なシーン

- ・ コスタリカのゆったり流れる時間、素晴らしい風景と人々の簡素な暮らし振り。
- ・ リタ・マリー・ジョンソンさん（コスタリカ）の落ち着き払ったそしてやさしい眼差し。
- ・ 会議参加者たちの平和への熱い希求とその可能性への確信。
- ・ アメリカのユース代表アーロン君の驚異的な成長振り。
- ・ 大勢参加した若者たちの積極的な態度と期待。
- ・ 弱冠23歳のタラさんの目を見張るマネジメント采配とエネルギー。
- ・ インターネットによる同時中継の衝撃。そして、それをたった二人の若者がパソコンでやっていた事実。
- ・ プエルトリコから初参加したサラさんの苦渋に満ちた母国の混乱情勢の話と彼女の素晴らしい写真。
- ・ ドット・メイバーさんの優しい笑顔と常に適格で素晴らしくまとまった報告。
- ・ 美味しいベジタリアン食事のありがたさと給仕するコスタリカ人たちの優しさ。
- ・ ホームステイ先のホストの心籠った食事と宿泊家の快適さ。
- ・ 毎日送り迎えをしてくれた地元タクシー運転手の笑顔。
- ・ 町の中にたくさんある有機野菜農園。
- ・ オバマ政権に手厳しいアメリカの参加者たち。
- ・ 美味しいコスタリカのコーヒー。
- ・ 会場で流されたデニス・クシニッチのビデオメッセージ。
- ・ ほとんど町では普段みかけないけれど、拳銃を携帯しないコスタリカの警官。
- ・ ビーピースからサミット会議のすべてを通して、コンピュータ映像操作をしてくれたアメリカのリックとデンマークのピワの絶妙なコンビ。
- ・ 会ったコスタリカの市民は司法平和省のことなど何も知らないこと。
- ・ 3年前に来たときとくらべて、市内道路が格段に整備されていること。

森田 玄

コインの表と裏

1. タクシーに乗るたびに運転手さんから、経済、政治、生活、平和についての生の声が聞けた。世界的な経済危機で、観光客が減り経済が落ち込んで失業率も高いと口を揃えるが、他の国よりましだと言う。生活パターンは変えず、将来に対する悲壮感もない。何となくゆったり感があるのが不思議。国や政治家には不満もあるが、軍隊がないのは誇りだと言う。
2. 元ニカラグア難民の守衛さんによると「20年前はかなり差別された。国が年に20万人も移民を受け入れたから」という。
3. 「コスタリカ人は偉そうだ！」と悪口を言う中米の人たちの言葉にトゲはない。
4. 車が通ると排気ガスが臭い国道には歩道もないので、道端の散歩は、あまり気持ちよくない。ところが、道端から10メートル離れると原生林の空気が心地よい。
5. 「アリアス大統領は立派な人だろうが親しみが湧かない」と庶民。なるほど彼の演説は格調高いが長ったらしくわかりにくい。
6. 前回のJAPANサミットも堅苦しくはなかったが、今回はそれ以上。緑の自然に囲まれた吹き抜けの会場。カジュアルな服装の男女が時に真剣に時に楽しく語り合い、協力して一つのを創り上げようとする姿はすばらしかった。
7. 英語の会話では外国人の平和・環境活動を大いに評価していた中南米の人たち。スペイン語での内輪の会話になってから「でもねえ。金髪の外国人を待たなきゃ自力で道が切り開けないなんて、情けないと思わない？」とはじめて本音がポロリ。
8. 米国からの参加者が非常に多かった。戦争に一番依存する国の市民が熱心に平和を求めている事実に希望が持てた一方、会議が、白人・先進国・英語主導で進んだことは残念だった。
9. 先進国の論理で進む平和運動の問題を認識する先進国の人が何人もいたことがよかった。
10. GA（平和省グローバル・アライアンス）の現状と今後についてまとめたドット・メイバーさんのパワーポイントも、英語とスペイン語が併記だったのはそうした配慮からだった。
11. 会議最終日に司法平和省副大臣予定者のMilena SANABRIA氏がボディガードなしでやってきたのにはさすがにびっくり。講演後「司法平和省の機能の多くは、既存の省庁にあったものが束ねられるだけです。大きく変わるのはどこですか」と尋ねると、それは「平和」という大枠が条文に載ったので、真正面から予算を要求できることだ」と満足げに答えた。
12. 講演後のグループ討議で、コスタリカの小・中・高の教師たちと話した。平和省ができる今、国と市民がどのように協力して平和を推進していくか。学校や職場での暴力を減らすための予防策や平和教育が中心テーマ。「外国との平和については話さないのですか」と尋ねると、「戦争がないのはあたりまえ」という。そして、平和教育にはお金が足りないと言うので、「平和省ができるのだから、これからは予算がつくでしょう？」と訊くと、「ちょっとはね。でもそんなに期待はできない」と苦笑い。現実は厳しいようだ。
13. カレン・オルセンさん（元国会議員、元国連大使、仲裁外交の名手。夫は軍隊を廃止したフィゲレス元大統領）がやってきたので、数年ぶりに挨拶した。でも、講演を聞くだけで最後まで聴衆に紹介されることはなかった。主催者に紹介を促すタイミングを逃がして後悔。
14. 「平和や環境のためにお金を出す用意のある企業は少なくない。お金をただ要求するのではなく、そのお金がどれだけ社会の役に立ち企業イメージ向上になるかを具体的に見せる技量が大切だ」という企業家の話は説得力があった。
15. 運営委員会方式を2007年に廃して、プロジェクト委員会方式を採用したGAの進み方に難点が見られたことにより、今回、一部適切な修正が加わったが、その経緯説明がなかった。
16. Cooperative Leader（協力的な指導者）が新しい考え方で紹介されたが、これは日本人にはお馴染みの「調整型の指導者」像。日本人が果たせる役割の大きさを実感した。

ここに平和がある！

平和アカデミーの真向かいにあるホストファミリーに着いて、熱帯の木々、花々、それに訪れる蝶や鳥の豊かな庭、そこを巡る峪のせせらぎ、遠くから近くへ来る時告鳥(雄鶏)の声・・・ここに樂園があると感じました。「自然」に平和があると思いました。同様に施錠せずに外出するマウイ島でも「樂園」を見た思い出があります。

コスタリカ(豊かな海岸)は世界の 0.1%の土地に 5%の生物多様性を持ち、死刑も軍隊も廃止し、自然と生物を大切にする国で、その環境と伝統が平和司法省に結果しその果実を享受出来る所です。世界満足指数、惑星幸福指数で第一位となるのも当然の事です。自然にある事が理法に適い平和で幸福であるのでしょうか。

このような素晴らしい境遇の中で平和省地球会議の場も「太陽の招き」とい自然一杯の吹き抜けの開場でした。そこでは会期直前に平和司法省設立、会議運営などに尽力した面々、世界で平和省運動に活躍する人たちの暖かい交歓、発表、討論が行われ、軍縮核廃絶に懸ける姿、非核地帯宣言取り組み等も印象的でした。

一、二日目は Discover, Dream, Design, Destiny に沿った平和省計画立案、三、四日目は講演と討論をしたのですが、夢想や逆の規制等やや自然から離れたかとも感じました。平和である事が究極目的であり、その過程で皆が平和大臣である事が重要ではないかと問いかけもし提案もしました。

会議では「平和とは」の意見交換もあり。そこでは個人と他者の「関係」が強調されていました。帝釈網の喩は意外に知られてなくグループのテーマにもなりましたが、その「単位」の水晶(個人)が浄化されるのも大切と JUMP の ML に投稿しました - 老子の「静かなる者のみ、静かならしむ」を添えて。

維摩経では「心浄土浄」と言い、浄心には浄土が見え、心を清めれば境も清まると言います。人間の文明が自然から離れ破壊し、地球問題群を抱えて第六次大絶滅を引き起こしている今、自然の大生命に帰り、心も土も清めるべきでしょう。平和省運動は平和実現の活動、生き方と共であると思われました。

大自然の真理と生命系の平和は一体であると印象付けられました。我中心の偏見、偏執を止めれば、自然の理法に安住し、誰でも今ここに調和、平和を体験し、極楽が実現できます。コスタリカのように良い環境も(特に平和の)伝統もある日本は努力を続ければ、皆共に平和を生き、浄土を実現できると思いました。



ミズーリ禅センター住持 大道魯参